

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

シチリアーノ 裏切りの美学

2019年/イタリア・フランス・ブラジル・ドイツ映画
配給：アルバトロス・フィルム、クロックワークス/152分

2020（令和2）年9月5日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本：マルコ・ベロッキオ
出演：ピエルフランチェスコ・ファ
ヴィーノ/マリア・フェルナ
ンダ・カンディド/ファブリ
ツィオ・フェラカーネ/ルイ
ジ・ロ・カーショ/ファウス
ト・ルツォ・アレジ/ニコ
ラ・カリ/ジョヴァンニ・カ
ルカーニョ/ブルーノ・カリ
エッロ/アルベルト・ストル
ティ/ヴィンチェンツォ・ピ
ロッタ/ゴフリード・ブルー

👁️👁️ みどころ

日本でもアメリカでも、そして韓国でも、ヤクザ映画は面白いが、それは人間が“性善説”では割り切れないため。さらに、悪には悪の魅力があり、悪には悪の美学があるからだ。しかし、「裏切りの美学」ってホントにあるの？

日本では、「裏切り」は謀反人の明智光秀や日本共産党の転向に結び付く最悪の言葉だが、シチリアーノにはそこにも美学があるらしい。

『ゴッドファーザー』ではイタリアのマフィアに見るファミリーの絆と結束が素晴らしかったが、本作もそれは同じ。日本人には馴染みのない登場人物ばかりだが、シチリアーノである多くのマフィアたちの生きざまと死にざま、そしてその美学をしっかりと鑑賞したい。

弁護士の目には200人以上の被告人を裁く法廷シーンも見ものだから、『コネクション マフィアたちの法廷』（06年）との対比もしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■シチリアには、更に「こんな男」も！■□■

イタリアはかつてローマ帝国を築いた国で、その都ローマは永遠の憧れの都市。そして、現在のイタリアは日本と同じくらいの面積で、長靴の形をした国として親しまれている。そのイタリアでは、地中海に浮かぶ小さな島・シチリア島が有名だ。日本の瀬戸内海に浮かぶ小さな島としては小豆島が有名だが、それは壺井栄の小説『二十四の瞳』（52年）によるものだ。

それに対して、シチリア島は、第1にジュゼッペ・トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』（89年）で、第2にルキノ・ヴィスコンティ監督の『山猫』（63年）、第3にフランシス・フォード・コッポラ監督の『ゴッドファーザー』3部作（72年～90年）で有名。『ゴッドファーザー』のメイン舞台はニューヨークの暗黒街だが、“マフィア的首

領(ドン)”ことヴィトー・コレオーネ(マーロン・ブランド)率いるコレオーネ・ファミリーの故郷はシチリア島だったから、対立するタッタリア・ファミリーから命を狙われた三男のマイケル(アル・パチーノ)は、故郷のシチリア島に逃げ込まざるを得なかった。また、『ニュー・シネマ・パラダイス』では、シチリア島は・・・？そして、『山猫』では・・・？こんなことを語り始めたらキリがないからやめるが、本作を観て、シチリア島には更に「こんな男」がおり、さらに「こんな物語」があることをはじめて発見！

「こんな男」とは、第1に原題の「裏切り者」である、本作の主人公トムマーズ・ブシェッタ(ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ)。第2に、ブシェッタの調書を取り、生涯をマフィア撲滅に捧げたジョヴァンニ・ファルコーネ判事(ファウスト・ルッツォ・アレジ)のことで。1992年にマフィアによって殺害されたファルコーネ判事は、今でも5月の命日にはイタリア中が正義の英雄として追悼しているし、彼を主人公にした映画『ファルコーネ マフィア大捜査線』(00年)も作られているようだ。このように、イタリアではファルコーネ判事が主役で、「裏切り者」たるブシェッタは準主役らしいが、本作でマルコ・ベロッキオ監督は、あえてそのブシェッタを主役に据え、2時間32分の何ともやるせない男のドラマを完成させた。なるほど、シチリアには、更に「こんな男」も！

■□■冒頭はパーティー風景から！でも「あれ」とは大違い！■□■

よくしゃべるイタリア人は一般的にパーティーが好きだから、そのシーンがよく似合う『ゴッドファーザー』でも、コレオーネ・ファミリーが集まった導入部のパーティーは実に華やかで、ファミリーの結束ぶりがよく目立っていた。それと同じように、本作は1980年当時、シチリアの町パレルモの麻薬取引を取り仕切っていたコーザ・ノストラのコレオーネ派とパレルモ派がパーティーに集結するシークエンスからスタートする。表面上は華やかだが、その実態は極めてヤバイ雰囲気を感じ取ったパレルモ派の大家トムマーズ・ブシェッタは、「新旧世界のボス」という異名を捨てて、現在の妻クリスティーナ(マリア・フェルナンダ・カンディド)を連れて、海外ビジネスの拠点であるブラジルのリオデジャネイロへ旅立つことに。

ここで面白いのは、17人兄弟の末っ子として生まれたブシェッタは、ファミリーが、とりわけ子供が何よりも大切だと考えていること。とはいっても、日本の戦国時代のように大っぴらに側室を何人も置くことはできないから、ブシェッタはどうするの？また、ブシェッタは、後にファルコーネ判事に対して、「自分は権力闘争よりも女のほうが好きだ」と供述していたが、どうもそれは本心らしいこと。そのため、かなりの数の子供を設けたが、元妻とその息子であるアントニオ(パリデ・チッチレロ)とベネデット(ガブリエーレ・チッチレロ)はブラジル行きを希望しなかったため、親友のピッポ・カロ(ファブリツィオ・フェラカーネ)に預けていくことに。

本作導入部ではこのような物語が描かれ、パーティーの最後には1枚の集合写真を撮ることになるが、ハッキリ言って私たち日本人はこのパーティーの登場人物を誰も知らない

から、この導入部のストーリーはわかりにくい。しかし、何はともあれ、“新旧世界のボス”と呼ばれたパレルモ派の大物ブシェッタが、表舞台のシチリアのパレルモからブラジルのリオに逃亡したことは確かだ。しかして、その直後に次々とスクリーン上に登場してくる惨憺たる情景は・・・？

■□■これぞヤクザ抗争！次々と残忍な殺しの風景が！■□■

日本では山口組を中心としたヤクザ抗争が何十年も続いているが、本作冒頭のパーティーのシークエンスで、一見和解したかに見えたイタリアのパレルモの町におけるパレルモ派とコレオーネ派との抗争も、自分だけさっさとリオデジャネイロに逃げ出していったパレルモ派のブシェッタの予見通り、激しさを増していったらしい。その攻勢を取ったのは、サルヴァトーレ・リイナ（ニコラ・カリ）率いるコレオーネ派で、ブシェッタ不在となったシチリアでは、パレルモ派の幹部たちは次々と抹殺されていくことに。ブシェッタの兄も殺され、息子たちの親代わりであるパレルモ派のボスであるカロとも今や全く連絡が取れない状態だ。

導入部のパーティーのシークエンスに続いて、本作では目を覆いたくなるような残忍な殺しのシーンがナンバリングされながら次々とスクリーン上で展開していく。さすがに、リオに逃亡しているブシェッタにはコレオーネ派の追及の手は伸びなかったようだが、『ゴッドファーザー』では、シチリアに逃亡していたマイケルの家も襲われ、愛する新妻は殺されてしまったから、ひょっとしてブシェッタも？

そう思っていると、ブシェッタの自宅に踏み込んだのは、コレオーネ派ではなく地元警察。逮捕容疑はリオでの大々的な麻薬取引で大儲けをしていたことだが、そうなるとシチリア人のブシェッタはリオで裁判を受けるの？それとも、イタリア政府に身柄を引き渡されるの？ブシェッタにとっては、麻薬取引の罪でどんな刑を食らうかも問題だが、それ以上に、イタリアに戻されること自体が大きな恐怖。だって、そこにはブシェッタの命を狙うコレオーネ派の殺し屋がゴロゴロいるのだから。さあ、ブシェッタはどうするの？

■□■裏切り者？それとも・・・？コーザ・ノストラとは？■□■

マフィアのキーパーソンとしてブシェッタが有名なのは、第1に“新旧世界のボス”、あるいは“二つの世界のボス”という異名をとったほど、イタリアとブラジルという二つの世界で権勢を誇ったため。第2に、マフィアで最初の“改悛者”となって、ファルコーネ判事に全面的に協力し、マフィアの組織図を含めた全貌を供述したためだ。さらに、あえて言えば17人の子供を作った父親には叶わなかったものの、3回も結婚する中で多くの子供を設け、「権力よりも女のほうが好き」を実践したため(?)だ。

2人の息子を含めて、パレルモ派の男たちが次々とコレオーネ派によって無残な死を遂げていく中で、ブシェッタはブラジル警察に逮捕され、イタリアに送還。そして、そこでファルコーネ判事と対面することに。イタリアの司法制度はよくわからないが、本作中盤のブシェッタとファルコーネ判事の“ご対面”は、男と男の腹を割った真剣勝負の会話

劇として興味深い。そこで、ブシェッタの口からさかんに出た言葉が“コーザ・ノストラ”だが、これはマフィアの全体構造のこと。その解明が、ファルコーネ判事にとって何より大切な任務だが、ブシェッタはその説明の中に、“ヤクザの誇り”、すなわち、言ってみれば「ノブレス・オブリージュ（貴族の義務）」のような意味も込めているらしい。

したがって、警察に逮捕され、バラバラと組織や仲間のことをしゃべる幹部は本来“マフィアの裏切り者”だが、ブシェッタの場合は“改悛者”という表現が妥当らしい。ちなみに、戦前戦中に国家権力からひどい弾圧を受けた日本共産党では、“転向（者）”が最大の悪とされていた。この基準からすれば、ブシェッタは最悪の“転向（者）”とみなされるはずだが、本作を観ている限りそんな視点はない。しかし、裏切り者と改悛者の線引きは難しいから、本作ではそんな視点からもブシェッタの評価をしっかりと！

■□■ブシェッタの暴露！各地で366人逮捕！その裁判は？■□■

日本では、1928年の3・15事件、1929年の4・16事件によって一斉検挙された大量の被告人について統一公判が行われたが、断固転向を拒否した市川正一は、その公判で日本共産党の党史について述べ、「党と人民の正義の事業が必ず勝利するだろう」と主張し、それは『日本共産党闘争小史』として出版されている。それに対して、“改悛者”であるブシェッタの供述によって、コルレオーネ派の凶悪犯罪が次々と明らかにされたことによって、イタリア全土ではマフィアが一斉に逮捕。「ブシェッタの暴露」、「各地で366人逮捕」、「歴史に残る電撃戦」等、新聞紙トップでは派手な見出しが躍った。その結果、1986年2月10日に“コーザ・ノストラ”の幹部を裁く大裁判の初公判が開かれることに。

シドニー・ルメット監督の『コネクション マフィアたちの法廷』（06年）（『シネマ29』172頁）では、被告人として起訴された20名のマフィア幹部たちの統一公判の姿が描かれていた。多数の証人尋問を要したその公判は、何と627日間もかかったというからすごい。同監督の古典的名作『十二人の怒れる男』（57年）でも、そのロシア版であるニキータ・ミハルコフ監督の『12人の怒れる男』（07年）（『シネマ21』215頁）でも、素人の陪審員がたった1人の被告人の有罪無罪を決める評議の大変さが描かれていたが、20名の被告人、76件の容疑、627日間の審理を経たマフィア幹部の裁判の評議はもっと大変だ。そう考えると、本作では、200人を超える被告人の裁判だから、更に大変。その審理は、どんな法廷でどんな風に進んでいくの？また、裁判官や陪審員は？

■□■イタリアの法廷にビックリ！これってホント？いやはや！■□■

私は、前述した『コネクション マフィアたちの法廷』ではアメリカ流の裁判のやり方を、『否定と肯定』（16年）（『シネマ41』214頁）や『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）等では、ドイツ流の裁判のやり方をしっかり学んだ。さらに、『依頼人』（11年）（『シネマ29』184頁）では韓国の、『裁き』（14年）（『シネマ40』246頁）ではインドの、『判決、ふたつの希望』（17年）（『シネマ42』147頁）ではレバノンの裁判のや

り方をしっかり学んだ。これらは『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』（19年）にまとめたが、本作後半に見るイタリアの法廷については、本作ではじめて学ぶことに。

本作では、第1に大型の体育館を丸々使ったような巨大な法廷に注目！第2に、たくさんの檻の中にグループごとに入れられている200名以上の被告人に注目！第3に、傍聴席になっている2階席のマスコミや傍聴人に注目！さらに第4に、本作のハイライトになるブシェッタと証人（被告人）との“対決”シーンに注目！『東京裁判』（83年）では、多くのA級戦犯を裁く裁判がそれなりの秩序の中で粛々と進んでいた（『シネマ45』52頁）が、何事も陽気なイタリア人が集まるこのマフィアを裁く法廷はそうではない。その騒々しさは想像を絶するものだから、「静粛に！」「静粛に！」と叫び続けなければならない裁判長は大変だ。しかし、これってホントの法廷の姿？マルコ・ベロッキオ監督は本作の法廷シーンを少し誇張しているの？

それがわからないままスクリーン上にはいくつかの対決シーンが登場し、ブシェッタはさまざまな見せ場を作っていく。そして、いよいよ審理は終結。判決の日を迎えたが、その結末は？

■余談(?)もタップリ!これもしっかり!じっくり!■

『コネクション マフィアたちの法廷』の法廷シーンは私のようなベテラン弁護士（ポンコツ弁護士?）にも見ごたえ十分で、法廷技術の粋を堪能できたが、本作の法廷シーンからは、その方面の収穫はゼロ。ただ、大量のマフィアを裁くイタリア式裁判の実態に驚かされるばかりだ。そんな法廷シーンの後には、被告1人1人に対する判決が字幕で表示されるが、アレレ、本作は152分の長尺ではなかったの?これで終わり?

そう思っていると、本作は余談(?)とも言うべき、「その後のブシェッタ」、「その後のファルコーネ判事」の物語に入っていく。「その後のブシェッタ」とは、“改悛者”として捜査当局への協力（供述）と、法廷での証人としての協力（証言）を終えたブシェッタが、その後の報復に怯えながら、家族と共に生きていく姿。また、「その後のファルコーネ判事」とは、マフィアの摘発に成功した後、さらにマフィアと癒着した政界にも捜査の手を伸ばしていた彼が、高速道路に仕掛けられた爆弾によって殺害される姿だ。世界一治安のよい国・日本ではこんなことは考えられないが、何かと自由を謳歌し、陽気な男女が集まる国イタリアでは、抗争が深まっていくと、こんな大規模かつ悲惨な事件まで!このマフィア抗争によって、ついにコレオーネ派の大ボス・リイナが逮捕されたが、その裁判は?

本作はご丁寧にもそこまで描いてくれるので、このタップリある余談(?)も、しっかり、じっくり鑑賞したい。しかも、このリイナの法廷シーンでは、1993年11月19日、アメリカからイタリアに帰国したブシェッタが、ファルコーネ判事殺害の首謀者であると同時に、自分の愛する家族や仲間たちの仇であるリイナと法廷で“対決”することになるので、そのシークエンスにも注目!

日本でも、ヤクザたちの生きザマと死にザマは面白いドラマだが、シチリアーノのマフィアたちのそれも実に面白い。しかして、あなたはブシェッタの生き方のどこに「裏切りの美学」を？

2020（令和2）年9月12日記